

現代の経済はきわめて多様な問題をわれわれに提起しています。一九八〇年代に「Japan as No.1」「Look East」と賞賛された日本経済は、九〇年代にはバブル崩壊後の「失われた十年」に陥りました。眼を世界に広げれば、多くの開発途上国が貧困からの脱出に苦悶し続け、八〇年代末からは、旧ソ連、東欧諸国において「社会主義体制」が崩壊し、市場経済への移行が始まりました。新興工業国・地域においても、一九八二年の中南米危機、九七年のアジア通貨金融危機など、成長の過程での種々の困難に逢着しています。先進国でも、財政危機、国際収支不均衡、金融不安定などの問題が継起し、その解決のための国内経済改革とともに国際政策協調の努力が続けられています。

大学院経済学研究科・経済学部では、現実が提起するこれらの問題を、的確に分析し、理解し、解決策を提示できるような研究を続け、そうした課題を担いうる人材の育成を目指してきました。歴史をさかのぼれば、東京大学において「経済学」の講義が開始されたのは、明治維新後間もない一八七八年（明治十一）のことで、その後、一九一九年（大正八）に経済学部が、第二次大戦後の一九六三年（昭和三八）に大学院経済学研究科が誕生しました。

真理を探求し、現実の経済問題を解決するために格闘するという経済学の性格ゆえに、経済学部は、時に、権力の弾圧を受け、あるいは厳しい理論的対立を生むなどの歴史をたどってきました。しかし、そうした困難を乗り越え、現在では、大学院経済学研究科に経済理論、現代経済、企業・市場、経済史の四つの専攻、経済学部には経済学科と経営学科の二つの学科をもち、八〇名近い専任スタッフ、三〇〇名におよぶ大学院生、八〇〇名をこす学部学生が、経済学の理論を、最先端の水準で学び研究するとともに、現実の経済や政府・企業・家計の制度的・歴史的・統計的研究を進めています。二〇〇四年に

教育・研究の現場から

大学院経済学研究科・経済学部

Graduate School of Economics, Faculty of Economics

伊藤 正直

大学院経済学研究科 教授

<http://www.e.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

は、大学院法学政治学研究科・法学部と共同で、専門職大学院として「公共政策大学院」を発足させ、公務員をはじめとする政策プロフェッショナルの養成も開始しました。

また、これらの研究を国際社会、国内社会との連携によって進めるため、大学院経済学研究科・経済学部には、「附属日本経済国際共同研究センター」、「附属金融研究センター」を併置し、内外の研究者、実務家との交流を日常的に図っています。

もう一つ、本研究科・学部が誇るべきものに、経済学部図書館があります。約六〇万冊の蔵書のなかには、マルクス自筆書簡、ケインズ・ハロッド往復書簡、アダムスミス旧蔵書など、世界中で本図書館しか所蔵していないものも数多く、加えて、内外の企業や企業家の一次資料の収集にも努めています。さらに、日本銀行貨幣博物館に並ぶ二万二千を超える古貨幣・二万五千枚の古札コレクションも蔵し、これらの蔵書・史資料は、内外の経済学研究者に広く利用されています。

二〇〇三年度からは、「市場経済と非市場機構の連携研究拠点」、「ものづくり経営研究センター」という二つの二一世紀COEプログラムもスタートしました。前者は、市場経済と非市場機構との関連メカニズムを、理論的・歴史的・政策科学的に解明し、新しい経済社会システムを構築するための道筋を示すこと、後者は、トヨタ生産方式や全社品質管理（TQC）など戦後日本企業が構築してきた生産・開発・購買の仕組み（「統合型ものづくりシステム」）の一般体系化を図ることを、それぞれ課題としています。この他にも、本研究科・学部のスタッフによる共同研究・プロジェクトも、数多く進められています。こうした研究を基盤に、大学院経済学研究科・経済学部は、アジアにおける経済学研究の最大の拠点として、世界に向けて、新しい経済学、深い経済分析を日常的・継続的に発信していきたいと考えています。



古貨幣コレクション



アダムスミス文庫



ケインズ・ハロッド書簡集

宇宙線研究所は、一九五〇年に朝日学術奨励金で乗鞍岳に建てられた宇宙線観測用の「朝日小屋」に起源を持ちます。五年に東京大学附置の宇宙線観測所となりました。この観測所は、わが国初の全国共同利用機関でした。七六年に、観測所は東京大学原子核研究所宇宙線部を吸収して宇宙線研究所となりました。現在、四つの観測施設・センターと三研究部門がありますが、研究者数三五人の小所帯です。宇宙線研究所は、東京大学の附置研究所の中でもユニークな部類に入らないでしょうか。

柏キャンパスに本部がありますが、われわれの観測機器はここにはありません。研究所は国内に三つ、神岡地下、乗鞍岳（二七七〇メートル）、明野高原と、海外に三つ、チベットのヤンパーチン（四三〇〇メートル）、オーストラリアのウーメラの砂漠、アメリカのユタの砂漠にそれぞれ観測拠点を持っています。神岡はとくに有名になりましたが、研究所の活動はそこだけではありません。宇宙粒子線の研究は観測に適した場所を見つけることから始まります。地下は、通常の宇宙線等の放射線バックグラウンドが少なく、ニュートリノの観測など稀現象を観測するのに適しています。海外での観測所は、日本では得られない高山や、大気中での発光現象を捉えるに適した乾燥地帯です。研究者は過酷ともいえる場所に赴き、測定器の建設や調整そして観測を行います。

宇宙線研究所の研究のほとんどは国際共同研究です。神岡地下一〇〇〇メートルにあるスーパーカミオカンデに関わる研究者は約一三〇名で、そのうち約六〇名が外国人（主にアメリカ）です。研究棟がある人口八〇人ほどの神岡町茂住という集落は、あたかも国際村の観があります。研究グループの打ち合わせ等はすべて英語です。修士一年生も、最初はたどたどしくても、一年もたてば、立派にコミュニケーションが可能になります。また、海外の観測

宇宙線研究所

Institute for Cosmic Ray Research

鈴木 洋一郎

宇宙線研究所 所長

<http://www.icrr.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

拠点の運用は現地の研究者の協力が欠かせません。研究代表者達は有能な外交官でもある必要があります。

宇宙線研究所は全国共同利用研究所です。全国で約三五〇人の宇宙線研究者が関わっています。したがって、われわれの研究成果も決して研究所からだけの成果ではありません。法人化により、附置研究所の「大学」としての側面が強く強調されています。「大学」を縦糸とすれば、共同利用は横糸の意味合いがあります。このうまい絡み合いが今後の課題となります。

研究所は宇宙粒子線を研究手段として動的な宇宙を解明するとともに、素粒子物理のフロンティアを開拓する研究を行っています。研究の柱は「地下」と「海外」です。神岡地下のスーパーカミオカンデでは、宇宙や素粒子、ニュートリノの研究をおこなっています。一九九八年のニュートリノ振動の発見は大きなニュースでした。これにより、現在の素粒子理論は書き換えなければならなくなりました。また、神岡地下では暗黒物質探索実験なども行われています。オーストラリアにある大気チェレンコフ望遠鏡では、二〇〇二年超高エネルギー・ガンマ線を発生している超新星残骸や、活動銀河核などの天体を発見しました。現在、ユタの砂漠に建設中の宇宙線望遠鏡では、限界エネルギーを超えた最高エネルギー宇宙線の存在の謎に挑戦します。また、一般相対論で予言される重力波の直接観測を目指すための技術開発もしています。

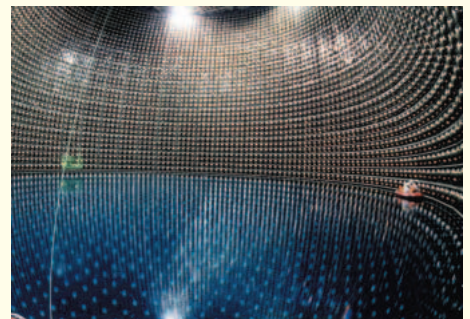
こうした、基礎研究には研究所のサイズとは逆に、大型の研究費が必要となります。しかも、外部資金、とくに企業からの資金を獲得することはほとんど不可能です。したがって、法人化後も、大学の支持・支援が必要なことはいうまでもありませんが、国からの支持・資金を得る新しい仕組みが必要です。



チベットの砂漠に展開されている空気シャワー・アレイ：宇宙線が大気に入ったときに起こす空気シャワーを地上に展開した測定器で直接検出する



オーストラリアの砂漠に設置された空気チェレンコフ望遠鏡（CANGAROO）：天体からの超高エネルギー・ガンマ線が大気に入射したときに発する光を、4台の望遠鏡で捉える



スーパーカミオカンデの内部：5万トン水槽の内面に1万1146本の光センサーが取り付けられている。水中でニュートリノが反応を起こしたときに蹴り出される粒子が発するチェレンコフ光を捉える